

要旨

目的：慢性疾患や高度な医療的ケアを必要とする子どもたちも、発達やQOLの観点から、病院から地域への積極的な移行を進めている。ゆえに、子どもと家族は、健康障害をもちながらも社会の中で様々な調整を行いながら生活を送っている。そのため、疾患の治療による回復とともに、子どもと家族の生活の調整も重要な課題となっている。入院期間の短縮や、医療的ケアが複雑化している中で、子どもとその家族を取り巻く状況を把握し、退院後の生活において予測される問題に対し、必要な支援を実践できるよう生活を視野に入れた退院支援が重要であると言える。

そこで本研究では、個別性の中にも共通して存在する入院から退院までのプロセスを明らかにし、患者の状態や家族の気持ちに寄り添った、生活を中心とした退院支援のあり方を考察していくことを目的とした。

方法：各事例において、行った看護実践と事例の経過に関する記述から、退院支援や家族の変化を表した記述を場面ごとに分類し、共通のステップを抽出した。

結果：4事例から抽出された、家族の自律に向けての生活を中心とした退院支援のプロセスにおいて、4つのStepが明らかになった。疾患や子どもの年齢、家族背景が異なる中にも共通のStepが見いだされた。退院支援のプロセスでは、子どもの状態の安定に伴い家族の気持ちの落ち着きが見られていた。そこから生じた、生活のイメージに合わせ、子どもに必要な治療や医療的ケアを学び始める家族の主体性の育ちが見られた。また、退院後の生活を安心して過ごせるように、治療の継続や医療的ケアを含めた生活を、安心して送れるようなサポート体制の構築や家族の役割分担を考えていく必要があった。さらに、家族が主体的に必要なサポートを選択し、生活を送れるように支援していくことで、長期の治療的介入を必要とする子どもと家族が、家族として自律していけるような支援の必要性が示された。

結論：長期に治療的介入が必要と考えられる子どもと家族の退院支援では、「相互作用」「主体性」「自律」を意識した支援が重要である。入院直後や子どもの状態が不安定な時期では、家族の力を知りスタッフ間で共通の目標を立て、入院環境への適応のサポートや不安が軽減できるような支援が重要である。家族の主体性の育てながら、子どもの治療的介入を考慮しつつ、家族がイメージする生活を具体的に構築する必要がある。退院後の生活に向け、不安や疑問を解決するサポートを行い、家族が主体となり、必要なサポートを選択し、生活を調整していけるような家族の自律に向けた支援が退院支援として必要である。